

安原貞室著 「かたこと」をよむ (上)

内容の分類解明と著作意図の推究

白木進

目次

- 一、著者の安原貞室について
- 二、かたことの内容と分類
- 三、著作の意図と姿勢

備考 本書は「一、●●(といふべき)を、△△といふはよし(わろし)」。と一条毎に、まず正語をかゝげ、次にかたことをあげて之を評する形を基本型とし、言葉の弁正を目して編せられてゐる。私は先に「頭註かたこと」(プリント私家版106頁)を印行した際、便宜上、各条にとおし番号をつけた所、全巻では八〇〇条、一―23(巻一) 24―114(巻二) 115―368(巻三) 369―624(巻四) 625―800(巻五) になつた。以下、この番号を利用して条項をしめす。

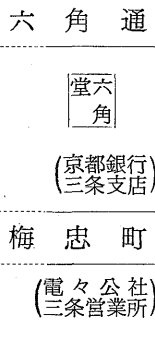
一、著者の安原貞室(一六七〇)について

徳川初期の俳人。名は正章、一囊軒また獨詠子と号し、京都三

安原貞室著「かたこと」をよむ(上) — 内容の分類解明と著作意図の推究 —

条(左京区梅忠町、烏丸東入)に紙商をいとなみ、鑑屋彦左衛門と称した。貞室とは42才で薙髪した後の俳号である。

……電……車……通……



昨夏このあたりをあるいてみた。六角堂のみ旧態をのこすが、梅忠町は今は高層ビル街で、昔の面影はなく、勿論貞室の遺跡もみつからなかつた。

16才の時、松永貞徳の門にいり、俳諧をまなんで貞門七俳仙(野々口立圃 松江維舟 安原貞室 山本西武 北村季吟 鶏冠井合徳 高瀬梅盛)の一人にかぞえられる。著書に正章千句(千句独吟之俳譜)、氷室守、俳諧之註、貞徳終焉記など。又玉海集七卷、同追加七卷を編し、別に本書かたことをのこした。みずからは俳諧人として世に処し、師の没後は花の本二世を称したが俳諧の実力はかならずしも之にともなわなかつたと評せられる。しかるにかたことは當時としては特異の述作として価値をみとめられ、かえつてこの方が

今日の国語学界から注目されている。

著者の教養は、少年の頃よりまなんだ俳諧修業よりえた物が中軸で、本書かたことの成立も俳諧の学識の流露とおもわれるが、また仏教徒としての素養もふかく、本書中、仏教の話にふれるもの29条、それも浄家(73 236)や台家・真言家(236)はすくなく、大部分は聖道門、特に禅・律に関するもので、おのずとその属した宗派も推察される。

かたこと全五巻にでる人名一覽、書名一覽をつくってみたいので左に掲げる。この面における著者の読書傾向の一斑をしるることができよう。

□かたこと全五巻にでる人名一覽

ア	敦忠中納言	305条
	姉ガ小路殿	65
	安倍ノ連(竹取物語)	667
	安然上人(叡山)	407
イ	一休(大徳寺)	49
	一条禅閣(兼良)	686
エ	江ノ匡房	31
オ	おつぼねの少将	305
カ	鑑真	336
キ	季吟子	800
ク	鳩摩羅三蔵	335
ケ	兼好法師	53
	玄旨法印(幽斎)	800
コ	行成大納言	305
	江ノ帥	31
	権六(假ノ名)	674
サ	作兵衛(々)	674
シ	春屋国師	342
ス	垂仁天皇	505
セ	千石少弐	83

□かたこと全五巻にでる書名一覽

(り)印は引用句よ類推した書名

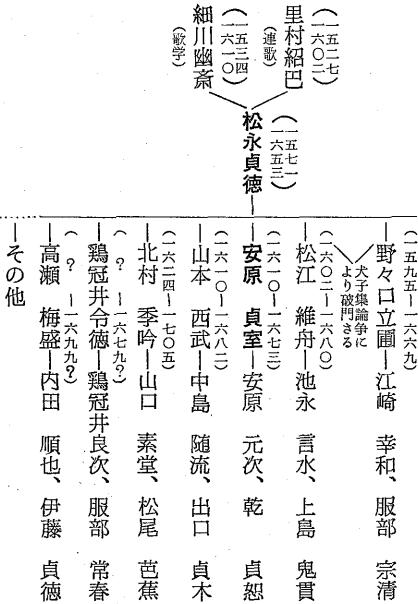
イ	伊勢物語	85条
	一休の仮名法語	49 359
エ	○易经(文言伝)	45
	○淮南子(人間訓)	14
カ	○神楽歌(早歌)	99
	仮名遣の書	627
	○兼輔集	53
キ	金葉集	549
ク	公家名目抄	65
ケ	源氏物語(桐壺)	10
	〃(帚木)	21 51
	〃(夕顔)	18 29 183
	〃(若紫)	345
コ	○孔子家語	75
	○古今集(1043番)	658
	玉篇	441
	後撰集(635番)	305
サ	○散木(奇歌)集	46
シ	史記(滑稽列伝)	30
	仕村方の書	591
	○新古今集(1329番)	286
	○新撰六帖	40
セ	清少納言がふみ	800
	節用集	442
	千字文	92

セ	善六(假ノ名)	674条
ソ	十河といふ武家	469
タ	大燈国師	343
ツ	筑紫の毛理(田道間守)	505
ト	東坡	593
ナ	南禅寺の何和尚	799
ハ	花開の某	800
	花開の先生	〃
フ	福祿寿	332
	武烈天皇	84
	文屋ノ康秀	28
ホ	細河幽斎	799
	布袋	333
モ	毛理	505
	牧溪	334
ヤ	弥兵衛(假ノ名)	674
	山崎宗鑑	800
リ	利休	406
レ	冷泉為秀	800

443条
667
293
53
14
627
85
228
288
28
440
13
569
46
288
359
231
11
82
40
87
序
66
304

タ	太平記
チ	竹取物語
ツ	茶ノ湯の書物
テ	徒然草 (22段)
ト	〇〇 (135段)
ニ	〇定家仮名遣
	定家聊天福の伊勢物語
	東城文集
	日本紀 (神代紀) 106
	仁王経
	百人一首
	〇扶木抄
	平家物語
	〇本朝無題詩
	万葉集
	水鏡 (一休仮名法語)
	名目抄
	〇孟子 (梁惠王上)
	〇礼記 (檀弓上)
	〇聯灯会要釈迦牟尼仏章
	論語 (里仁)
	〇〇 (子路)
	〇〇 (陽貨)
ワ	和名抄

(イ) 貞室の学統



安原貞室著「かたこと」をよむ (上) — 内容の分類解明と著作意図の推究 —

貞徳(承徳三年二月)終焉記(一巻、貞室著)にいう、
 やつがれ「貞室」いかなるすぐせにや、いとわらはよりなれつか
 ふまつりて、ことし二十九年、この道に足さし入ては二十六年、
 「この時42才、すなわち16才より師事」一日もその御心にたがは
 ず、……二とせあなたの薬月に、俳諧の判詞を乞ふ人あらば点を
 合せよとゆるしのふみ下して、云々
 とあり、よつて慶安四年八月、判者たるをゆるされ、やがて師の後
 をつぎ花の本二世となる。

(ロ) かたことの内容系統

歌人は歌語を洗練したが、俳人は新境地の開拓に俗語を駆使し
 た。

俳諧には連歌の徳の外に五つまさりたるたのしみ待るとかや……
 第一に俗語を用ふる事(斎藤徳元―俳諧初学抄)

抑はじめは俳諧と連歌のわいだめなし。其の中よりやさしき詞の
 みをつづけて連歌といひ、俗言を嫌はず作する句を俳諧といふな
 り。(御傘の序)

彼等はいかてあたらしい語法の工夫、特に語彙の研究につとめた。

俳諧者流の著作が、発句・付句をのせ、俳諧を論ずるかたわら、俗
 語を主とする語学の面にふれる事のおおいはそのためである。貞
 徳はその開拓者だが、彼の慰草(慶安5、1652)、御傘(慶安4、
 1651)をはじめとし、その門流から

斎藤 徳元 俳諧初学抄(寛永18、1641)
 野々口立圃 はなひ草(寛永20、1643)

野々口立圃 言葉寄 (刊行年不明)

松江 重頼 毛吹草 (正保2、1645)

山本 西武 久流留 (慶安3、1650)

などあり、かゝる雰囲気の中から、慶安3、1650年に貞室のかたこと刊行をみるのである。

「かたことの内容系統」を图示すれば、

前駆——→かたこと——→後世への影響

徒然草などの言語美意識

貞徳などの言語矯正意識

節用集 などの文字・字義

醒睡笑などの話題

毛吹草卷二などの世話(諺)

その他

かたこと (五卷) 800条
(浮世鏡第三〔かたこと補遺〕310条)

↓片言なほしの類書をさそう

↓方言採集の気運をうながす

↓俚諺研究を促進する

浮世鏡 第三は零本で著者も刊行期も不明ながら、巻頭に

此巻より下は詞のあやまれるをしるし侍る也。これよりさきに俳諧師貞室が片言の書五冊をあみて世におこなひぬ。これにもらしたるをかき侍れば更にひとつ事にあらず。此故に是にもれたるは彼書にありと知給ふべし。

とあるにより、かたことの補遺たるをしる。収める片言は三一〇条ただし「詞のあやまれるをしるし侍る。」にとどまり、よしあしの判

断、評語はみえない。かつ、かたこととは反対に、まずかたことをかゝげ、次に正言をあげている。文中に都の名所、寺号をならべ、ひく所の地方語も近畿・中国を中心とするから、おそらくかたことの後、程とおからぬ期に、やはり京都で刊行されたものだろう。

文化の中の東遷 (京阪から↓江戸へ)

かたこと刊行から四十年にして元禄をむかえ、文化も東遷の気運つよく、言葉の面でもかつては吾妻言葉とさげすまれた江戸語が抬頭、上方語と拮抗するにいたる。

かたことをうけて、「言葉なおし」や「諸国詞づかい」をとりあげた類書、末書は元禄頃から数おおくみられる。元禄四—不重宝記大全は諸国かた言を論じ、元禄六—男調法記(男重宝記)巻五ではかた言なをし、日本諸国詞づかひをあげる。方言物類称呼が出るのは、年代もくだつて安永四年であるが、著者吾山は越谷出身で江戸にすんだ人であり、全国および琉球までの方言を網羅し、とりあげ方も東国を中心に江戸語がおおく、関西や上方語はその対照の形であつかわれている。

二、かたことの内容と分類

1、篇次と体裁・刊本

全五巻、各巻頭には一、嘉多言 二、佳太言 三、假察言 四、開他故東 五、可太古止 と万葉仮名で表題をかゝげる。

序文について本文は全篇八〇〇条。はじめは「冥加」、「自在」と

おもいつくまゝに、あるいは平素懸案の主題をとりあげているが、やがて第三巻のなかばからは篇目をたて、

卷三(後半) 時節 人倫並人名 衣服

卷四 器財 支躰 病名 木草 虫 魚 鳥 獸 飲食 国名

所並寺号

卷五 居所 雜詞 湯桶言葉 いはずしてもことかき侍るまじき

こと葉

とつゞき、最後の第八〇〇条を、雪 雨 霜 みぞれ 霧 露 霞の自然現象のおかしさを叙してむすんでいる。

刊本には慶安三年(二六五〇)京都中野道判刊、

〃 荒木利兵衛刊、

の二種あり、字句には殆ど出入がない。前者が昭和6年、古典全集に収録され、後者も同15年、国語学大系の19巻としてそれぞれ活字本となり、一般人も入手しやすくなった。昭和47年、武蔵野書院刊の近代語研究第三巻には荒木本を復刻、重要語句索引も付せられた。

2、かたことの意味

イ、幼児の未完成の言葉。

「かた」は物の一部分、また半分をさす。蜻蛉日記上「ここなる人かたことなどするほどになりてぞある」。など平安期の用法は幼児のことばをさし、宇津保^{巻上}「物も覚えず酔はし給へり。……といふ声も、かたことのやうなり。」も酒に酔って廻らぬ舌の声が小児のかたことのような意。

ロ、大人の至らぬ言葉。

乳母の草子の、「短冊などにカタコトかきたるは尚みにくし」。のごとく、室町期には大人の至らぬ言葉の意にもつかった。更に日葡辞書に、「訛つて正しからぬ発音をした言葉」。と解したのは音声を重視したもの。

ハ、(貞徳や)貞室のいうかたことはすこし広義である。

貞室は38才の時、正章千句を編し、判者としての師貞徳の批正をおいでしているが、第三、蝦(カハツ)の第38句、

とらまへたしや千年の鶴の「とらまへたし」の語に対し、貞徳は

「世のカタコトをカタコトと知て鰥とは用ゆる例あれども、カタコトとしらで用ゆるカタコトは誹諧に用るざる法なり。コラユルはよし、トラマユルは京童部のあさましきカタコトなり」。ときびしく批判している。

ちなみに正章千句は追加百句をくわえて千百句のうち、長点をかけられしもの一七二句、賞詞のおおいに、このカタコト「トラマユル」に対する此言は目だつ。

師貞徳のこのかんがえ方、この姿勢は彼におおきく影響したにちがいない。(このトラマユルはかたことの60条にもとりあげている。)

貞室は日葡辞書の指摘するような音声学的意識はもちあわせていなかったが、師貞徳をうけて、後掲内容一覽表にみられるごとく、撥音、促音、拗音、略音、延音などの訛言、字音・字義のよみあやまり・ききあやまり、「御」のつかい方、漢語の用法、さてはき、

にくい言葉、耳にたつ言葉、いやしい言葉、いわずしてもことかくまじき言葉などがひろくかたこととしてとりあげられている。

徳川期の用語は、人により多少の差あり、しかし「かたこと」といえば概して地方の言葉、下層の言葉をさした。文字も「片言」が多用されたが、**頭節用集**、**書言字考**、**俳字節用集**などは註と書いて「かたこと」とよませ、京伝の通言総離の凡例には「**詔**、**詔**不_レ改」と詔の字をかく。註は諸橋の字書にもみえず、たゞし聖は「地がつらなる」意とあるが不明。詔は字書に「ことばがみだれる」とある。

また方言という語も片言と近似した語感でつかわれたらしく、一九の著作に方言競ムダクワベ(文化12年)あり、三馬の浮世床初稿上には「……させるをせるきなどいふたぐひ、下俗の方言也。」という。

二、松岡の古語辞典8頁にいう、「音便と訛とを同一視してはならぬ。……地方に現はれるもの一方言。個人的な僻一片言」。

「かたこと」の内容一覧表

3、内容一覧表

かたことの全五巻八〇〇条は、各条長短さまざまで、とりあげられた内容も多岐にわたるが、その論法はたとえば

1、冥加といふこと葉のつかひやう有べしと云り。
100、いづく・いづく・いづちなどいふべきを、どこといふはくるしからず。

500、くぬぎ櫛をくのぎははわろし。」
のごとく、まず正語を提示し、次にかたことをあげ、之に著者の意見をくわえ、かたことに対しては良否の、あるいは許容の判定をくだす。単なるかたことの羅列、記述ではない所に本書の面目がある。

今、かたことの内容の大概をしるために、各条の冒頭に提示された語だけのとりあげ方を一項として分類してみると、およそ次のようになる。(数字の下に線を引いたものは、副次的分類の場合である。)

分類		例		該		当		条		項		備	
促音	訛	10中くをなつかなか	98徳政をとくせん	24	281	10	116	5	7				記三、名為浪連園、亦曰浪華。今謂難波、訛。注云、訛、此云与許奈略などをさす)
				24	298	10	116						
				32	324	24	122						
				36	346	25	128						
				90	356	26	137						
				96	362	27	141						
				98	364	28	144						
				110	369	51	148						
				112	374	53	166						
				113	401	80	166						
				121	401	91	166						
				123	426	99	199						
				124	433	115	213						
				131	439	116	220						
				137	445	122	237						
				141	455	128	246						
				144	480	193	268						
				148	516	198	270						
				166	527	244	275						
				199	545	254	278						
				213	555	258							
				220	574	261							
				237	600	274							
				240	606	276							
				241	619	277							
				260		296							
				263		316							
				268		327							
				270		361							
				275		373							
				278		375							

中へ	下へ	上へ	付けたる 文字	略	略	略	略	略	略	清音	濁音	直音	拗音	
112 度毎、たんびごとと	132 不慮一ふりやうふてん	89 常住一さんぜじやうじゆ		い。ま。ぞ。つ。と。ま。つ。と	68 か。ま。び。す。し。ぎ。一。ひ。す。い	798 湯を飲まふ一湯のも	18 精進しやうじん	93 あ。い。し。ら。ふ。一。あ。し。ら。ふ	74 云甲斐なし一ふがひなし	162 幽玄をゆうげん	23 誰をだれ	127 大略をたいらく	31 江師をかうし	
112 352 377 378 397 451 519 592	444 457 477 492 511 521 522 531 577 588 638 656	37 39 49 136 146 161 177 190 194 207 211 212 224 232 233 238 273 294 301 307 312 315 341 345 349 363 391 414 418 423 437	89 98 540	58	68	798	453 454 462 481 494 517 530 551 559 575 578 587 601 604 607	18 45 50 58 86 93 289 114 143 167 170 179 185 191 192 195 269 271 315 328 330 331 333 354 357 379 400 412 434 442 450	64 93 119 157 210 219 295 311 318 319 321 325 399 440 447 459 460 472 506 523 526 532 557 581 582 583 589 614 626 631	60 74 677	162 163 204 217 226 266 486 495 497 572 608 671	23 101 299 322 515 546	127 140 151 222 332 348 420 430	31 95 102 111 133 176 182 183 186 251 270 285 309 314 382 385 407 409 411 429 543 554 644 645
5.4				5.4				3.5		3				
(世話盡には続 詞の語あり。)				68 こと成べし。				18 …下略なればは ねずとも苦し かるまじ。		60 …上略なれば苦 敷しかるまじき				

(音韻)						音節	子音	子音	母音								
						転換	脱落	転換	転換								
同音の区別	さとしやは通へどまことによるべし	は(ば)行・ま行相通	い・ひは同じければなり	二四はち話 <small>づま</small>	ことあり。濁るといふ	連声	五音相通	14 懸 <small>かけろく</small> 緑	594 美作 <small>みまさか</small>	106 階 <small>きざはし</small>	41 越 <small>こ</small> 所 <small>ところ</small> をつす						
15	183	171	282	155	392	28	109	14	594	466	106	651	567	488	365	41	
347	543	181		156	230	67	200	79	646	467	125	652	568	498	368	104	
	(38)	184		227	231	142	205	103		479	130	657	570	500	372	109	
		215		255		248	218	118		493	139	658	576	501	381	129	
		219		(269)		262	221	138		496	142	673	580	502	383	145	
		394		(289)		293	279	153		499	150	676	584	504	384	168	
		395		(406)		342	359	203		512	165	678	585	507	389	169	
		464					569	223		514	171		586	508	390	174	
		496					652	243		518	172		590	509	403	175	
		501						264		524	180		591	510	419	178	
		537						320		537	181		597	520	422	188	
		538						334		538	189		603	525	424	189	
		564						410		556	202		610	528	425	196	
		598						637		558	208		613	529	427	200	
		621						648		564	219		615	533	428	214	
		646								573	225		616	534	432	215	
										579	239		617	535	435	216	
										598	250		618	536	436	218	
										602	253		620	539	438	229	
										612	259		621	542	443	247	
										655	351		623	544	446	252	
										672	367		624	547	449	256	
											370		625	548	458	257	
											371		627	549	463	302	
											380		628	552	465	310	
											394		629	553	471	313	
											395		630	560	474	323	
											408		632	561	475	355	
											421		633	562	476	358	
											448		635	563	478	359	
											464		639	565	484	360	
												8				17	
347 同朋 <small>どうぼう</small> を <small>は</small> い <small>は</small> ず。堂坊 <small>どうぼう</small> と	濫 <small>らん</small> 抄 <small>しょう</small>	共に唇音(和字正)		392 灯心 <small>とうしん</small> を <small>ん</small> は <small>わ</small> ろ <small>ろ</small> し。	657 五音通じて <small>ろ</small> ろ <small>ろ</small> し <small>し</small> から <small>し</small> ぬ <small>ぬ</small> か <small>か</small> 。	652 五音通じて <small>ろ</small> ろ <small>ろ</small> し <small>し</small> か <small>か</small> 。											

言 語 論	文章、書札に か 場合の戒	罵 言 を 戒 し む	漢 語 の 乱 用 を 戒 し む	俚 諺 の う ち	格 金	言 言	幼 な こ と ば	故 実 を と く	教 詞 の よ み 方	女 こ と ば	忌 み こ と ば	紛 れ こ と ば	擬 音 語	(混 種 語)
				言はずしてことかき 待るまじき詞			305 お乳の人 おちい			262 およれ、おひなれ	383 祝ひを わると書 かんにてゆ	71 とふらふ (とむらふ(弔 訪)	51 ひつたりといふは、 板ひく音成べし。 引ひ	640 たらゆる つかまゆる ↓ たらまゆる
5	4	28	19	785	13	13	305	16	272	262	107	50	733 702 656	640
13	245	286	21	786	755	45		17	281	(386)	383	71	734 703 659	
53	65	295	290	787	756			66	344	571		187	735 704 660	
158	291	28	(794)	788	757	52			445	593		383	736 705 661	
288	405	34		789	758	75			550				737 706 662	
291	406			790	759								738 707 663	
405	505			791	760								739 708 664	
406	550			792	761								740 709 665	
505	593			793	762								743 710 666	
550	637			794	763								711 667	
593	640			795	764								712 670	
637	744			796	765								713 679	
640	799			797	766								714 680	
744					767								715 684	
799					768								716 685	
800					769								717 686	
					770								718 687	
					771								719 688	
					772								720 689	
					773								721 690	
					774								722 691	
					775								723 692	
					776								724 693	
					777								725 694	
					778								726 695	
					779								727 696	
					780								728 697	
					781								729 698	
					782								730 699	
					783								731 700	
					784								732 701	
2				7									8.5	
も醒の睡笑と一致する														

地方語		都のことば	挿話
南蛮言葉	53	1	283
唐人口	53	5	305
唐国人のことば	53	13	330
豊後のこと葉	288	15	406
近江丹波	288	75	407
近江こと葉	60	349	469
えぞが千島のこと葉	53	649	505
北国こと葉	69	654	799
坂東ことば・あづまこと葉	28	800	
		(431)	
		662	

4、批評の評語のくだし方と判定の段階

評定のあり方は、当時ひろくおこなわれた俳諧の判者のそれを延用したのであろう。評語はおよそ可否に二大別されるが、

(イ) 可とする場合

85よし 59よろし 48よき言葉 23やさしき言葉 66しほらしき

言葉 40可し然 33きぎよう侍る 20といふべし……(9種)

(ロ) 否とする場合

45悪し 67わろし 72あしき言葉 79俗語 9ひが言 64かたこ

となり 75拙し 87耳にたつ 21うるさし ……
のごとく評する。しかし元來かたことをとりあげたのであるから、
否とする場合がおおいのは当然で、その範囲もひろい。(ロ)の段階からさらに否定の程度が嵩じると、

75せめて……といへかし 10いはぬにはしかじ 79うちうちにも
いふべからず 78仮にもいふことなけれ 642よく〜謹み嗜みて
いふべからず のきびしいものまで、およそ否とする評語は44種
におよぶ。

安原貞室著「かたこと」をよむ(上) — 内容の分類解明と著作意図の推究 —

(イ) 23如何 653如何と云り 10如何侍らん 76如何とぞ覺ゆ など
「如何」の語も非常におおい。一応疑問提示の形ではあるが、純
粋の疑問(たとえば67)はごくすくなく、大方はやはり否定の
評。
679苦しからぬか 苦しかるまじ 458苦しからず の用法もおおい
が、之は「まあまあ……」と看過し許容した場合の判定語。そし
て

(ニ) 660よしあし侍らず 68出所知らまほし 654可レ尋
などは、問題提起にとどめ、みずからは判定を遠慮した例であ
る。

さてしからば、その可否の判定は何によつてくだされているの
か、何を基準としたのか、貞室がいかなる語を是としあるいは非と
したか、いだいていた国語観はどのようなものだったか、は前掲の
内容一覽表をみればおおよそ見当もつくが、次章においてその面にも
ふれて論をすゝめた。

三、著作の意図と姿勢

(A) 著作の意図と論述の工夫

1、序に「さたすき侍るころ独の子もたり。もとより家まつしけれ
ば、おほしたてぬるさまもはつかしのもり、めのとさへおさくく
侍らて、みつよいつくむつれあふ友達かたらひにも、いとつた
なきかたことをのみ云侍る。佗しけれど、ひとつくいひしらせ
んもかきりしなければ、そゝろに這一帖に記してかれにとらす。

④ これはみつから少年のむかしより、いまかゝる老のすゑまで、く
ちに馴ていひ侍を、きこしめし、おりく、しかり給へりし老師
の厚恩をおもひいつるまゝ書つけぬ。此つるてにかたはらいたき
今案をも、みなたゞ言葉もて記し侍るは、愚子か見ときやすから
んためなり。云々」
之によれば本書は

①、庭訓の書であり、

②、戴恩の記であり、

③、ついでに著者の近案をかきつらねるが、それも愚子の見ときや
すいように、たゞ言葉をもちいた。という。

そもそも序文とは、巻頭に述作の主旨、成立の由来などをのべる
ものだが、時あつてか謙辞、謝辞が中心となることもある。説者を
来客にたとえれば、玄関の訪問者を客間に請じ、わが方の挨拶、近
況をのべるようなもの、ここできならずしも柴屋裏をみせるわけ
はない。

この時点で、師貞徳は80才、一子元次は10才であるから、まず老
師に謝し、また幼児の成長をいのるのは当然である。

2、しかし本文八〇条を通覧すると、前掲内容一覽表がしめすこ
とく、資料をひろく、たかくとりあげており、そのとき方も一子
へというより、一般大衆へよびかけている事を重視したい。しば
しば貞徳の教をひく(序10、28、の外、694、800には句作三を引
用)点も、戴恩の記であると共に、師承をたつとんで自説の正当
性を裏つける当時の慣習であり、また大衆説得に權威をもたせた
ものとおもわれる。

3、都人は「京こと葉こそ国の標準語」としてはほこりをもつ

孟子トウに、吾聞トウ夏變トウ夷者トウ。未聞變トウ於夷者トウ也。とある。中央と地方との力の關係を説明したるもの。わが平安京は桓武以來の都であり、その京ことばは国の標準語として、ながく都人士の誇とする所であつた。しかるにやまと朝廷の昔から、「難がなく」(枕詞)ごとき言葉とみなされ、「だみたる声」とさげすまれた吾妻言葉が、武士の勃興と共に徐々に都にせまり、政權が鎌倉幕府に、ついで足利幕府とつゞけば、都人士も「いつしか云も習はぬ坂東声をつかひ」(太平記三)さらに、織豊時代をへて今や徳川の時世となり、岐阜・尾張・三河の言葉が現実に入進してきている。著者は「をれ」という語の主題の条に、

「尊氏公の世中を心のまゝにしたまひつる比より、別てはやり出侍りて」(288条)といひ、

「応仁の乱れより都の風俗おほくことあらたまりて、あしう成行侍しとかや」(53)ともいふ。

「治者の言葉が被治者の言葉を支配する」(柳田国男)のは自然の流とはいひながら、京ことばをこよなく愛する都人にとつて、東國風のダミ声、それに類したかたことは、きくにたえないものがあつたとおもわれる。

ロドリゲスは日本大文典(土井歌本)の国郷談の条にいう、都の言葉遣が最もすぐれてゐて、言葉も発音法もそれを真似るべきであるけれども、都の人々も、ある種の音節を発音するのに少

しの欠点を持つてゐることは免れない。」

地方語に、特に東國語におされたとはいへ、京ことばはやはりもつともすぐれた語であり、まねるべき言葉なのである。京にそだつた貞室が、誇とする京ことばの伝統をまもるべく、その俳諧人としての鋭敏な言語感覚と、師貞徳ゆずりの國語愛・規準語的美意識とで、批評を念願するのは自然の事とうなずかれる。

さりながらかたことは田舎のみならず、既に都におよんでゐる。かたことは今やひろく都人士の口にはのぼつていたのである。その矯正是容易ではない。

4、矯正の可能を信ずると共に、己も努力する

13条にいう、

かたこといひと名にたちたる人とても、十たびうごく口に二たび三たびに過べからず。七たび八たびはよろしきこと葉にて侍る物なり。然らば一言づゝにても直し改むべきと、心にかけて勵み侍らましかば、いかに物おぼえのうとくとも、程なふ改め直すべし。物おぼえのさときかたは、只二度きゝてもおぼえ侍るべし。……人としてかたことを悔改めずば鳥にだもおとりたることと云り。

とつよい信念の程をみせてゐる。矯正を他人に要望すると共に、己もまた不断に研鑽し修業しつらしく、

出所しらまほし—10 37 (47) 49 68 82 120 152 180 242 259 304 795 797
可と尋—41 63 70 91 152 179 248 331 558 632 654 669 682
他日のために書付て置く—序 152 632 653 795

などの語や条が目だつ。之をみても本書が単なる庭訓・戴恩の書ではなく一般人のかたこと批評と共に、みずからの勉学のメモ、こと葉研修のおぼえが主であったことがわかる。

5、批評が角だたぬよう、叙述面での工夫

かたことを口にするのは今や都の人々である。かたこと補遺ともいうべき浮世鏡^{第三}には序で次のようにいう、

都は土地清らに水すなほなれば、音律かろくすみてたゞしとかや。されども片言は夷中^{みなか}にまさりておゝく侍り。

と。かたことの矯正を要するのは、田舎人よりもむしろ都人であったのである。とはいえ矯正の対象を露骨に名ざしたのでは共鳴をえがたい。そこで著者は表現に工夫をこらす。

イ、「愚子がためのいましめ」(序53 343 505 550 789)を標榜して愛児教育に共感をもとめる。

ロ、「田舎人がはなすかたこと」(一5 13 15 75 349 649 654 800)

としてとりあげ、都人の詩をうしなわせぬようにする。その他ハ、ある人の言葉―87 88 259 283 505 790 799

ニ、小賢しき人の説―593 637 799、或説589、一説637

などの登場人物をもうけて対象を緩和する。また

ホ、「児、喝食、女房」のこと葉(11 21 22 23 503)、あるいは女房少人の言葉(461)、若き人(283)の言葉をいましめる条が目だつが、之らもまた引合にだした配役のひとつともとれる。

へ、地方の方言も実際にとりあつた。

坂東ことば―28 30 48 662 あづま言葉―29 48 夷が千鳥のこと葉―53 北国こと葉―69 近江こと葉―60 近江丹波―288 豊後国―288 をあげ、「此外も遠国のこと葉に、さぞめづらしきことおほからん。」²⁸⁸ といい、更に

唐国人のこと葉―53 唐人口―53 654 南蛮言葉―53 にも言及している。

当時の俳壇は貞徳派の独壇場といつてよく、貞室編の玉海集(貞門の句集)は発句二六二〇余、付句五八〇余、その作者は全国にわたり六五八人におよぶ。故に貞室が全国の方言に接する機会はすくなくかつたとおもわれる。

ト、かえりみて他をいうのではなく、都人としてのつよい省察もわすれてはいない。

「……京の者の口になれてむまれ付たること葉のやうにて、なをりがたし。とりわきみづからなどはえなをし侍らず。田舎人のわらひ侍る京こと葉は是等第一なりとかや。(642)

自己の今案についての(序)、また注についての(70)反省もよくでている。

かたことの著作動機については、昭和30年7月、「嘉多言の著作及出版動機とその内容価値に関する一考察」(私家版、後に近畿方言双書第五―昭和32年1月)という大田栄太郎氏の論がある。大要は

「かたこと」著作の動機は、愛児のためのものではなく、一般大

衆に対する国語意識の啓蒙涵養であるとし、理由として

一、文章及用語について

如何 ……にや とかや 侍る敷 など疑問型がおおい。

愚癡蒙昧 看経 諷経 幽玄などの語は子供にはむづかしい。

二、敬語及その一類のことは

御盃をいたゞき侍らん の項をみても、敬語の問題は識者の間に

さえ誤りがあり、酒盛の礼儀などは子供に似つかわしくない。

三、総合的にみて

序文に「……ふかく函底にひめてをのが言葉をつゝしむべし。他人の為に記すにあらす ゆめ。」とあるごとく、「後年にみよ。」

という遺訓書であるかというに、

……まづ書付て置てこそ、人にもたづね明らむべし (巻三)

……物に書付て置くこそ、人にもたづね待るべけれ (巻五)

とあるのが、正に著者のいつわりのない執筆動機でなからうか。

愛児元次だけへの言語教科書なら、もっと児童向に編纂さるべき

であるが、何かの拍子で急に上梓となつたので、わが子にカタコ

トのあるのをおもいあわせ、之に因縁つけたものであらう。とい

い、さらに

かくみると、「かたこと」を、当時としては画期的な子供への言

語教科書とみると、一般大衆に対する国語意識の啓蒙涵養とみ

るのとは、価値観がちがってくるが、貞室の国語及国語教育へ

の理解、京ことばに対する見解は傾聴に価するものである。

として、それらを簡条的に細説している。

(B) 執筆にみる著者の姿勢

一、庶人の身分を自覚し、僧家、武家に対しては敬遠の態度をと

り、特に公家のことは口にすることをさける。

65、惣じて禁裡仙侗の御ことは庶人の口にていふべきことにあら

ざれば、公家名目官爵の誦かたなどは皆もらじつ。

405、草鞋、天子に着し給ひて臣下は不用。但法中には用ゆとか

や。そのほか……様々侍るよしなれど不知。

口、みずからを信ずること大なるも、謙虚さをうしなわぬ。 (序

642) みずからもたえず修業した跡は、前述(前1642、序、740)の

語にもみえる。

貞徳終焉記にもみることく、彼は師に対し、人に対し温厚な人柄

であった。

ハ、文章を「たゞことばでしるすのは愚子がよみやすからんため」

と序にいうが、理窟っぽい内容をもつ本書が、よんでは平易、時

に理論あり挿話ありで、おもしろいのは、著者のゆたかな文才を

おもわせる。

二、当時の発想として特に「創意にとむ」点は、

1、音声言語(口頭語)と文字言語(文章・書札)との区別を意

識していること。(45 28 34 245 295など)

2、音韻・音調をとりあげている。(21 65 85 236など)

3、唐人口・南蛮言葉などとあたらしい空気にもふれている。

(—新村博士は、師貞徳はキリシタンとふれあいのあつた事を

といている。)

4、擬音語に着目し、巻二に5カ条、巻五に69カ条をとりあげて
いること。

ホ、古をよし（53406など）とし、名目を尊重する姿勢は随所に続出
する。古典・故実がとうとばれる。

392、燈心とうしんを　とうしん・とうずみなどはわろし。う・むの下は濁
るといふ事あり。……是は常に人のしらぬ名目なり。

48、……ぬかりといふは、吾妻こと葉なれどよきこと葉と云り。
……あづま路の道のぬかりの馬ざくり……などとよめりしも、む
かしの歌とかや。

たゞし典拠があつても、時代のちかい謡曲・狂言のこと葉には批
判をくわえる事もあり（35）、特に同時代の俳諧における作品
や、判者の態度・評点に対しては、時にきびしい苦言を呈してい
る（9・15・28）。

へ、言へば言はるゝもの、諍ふべからず。（165）の態度

言葉は変化する。情勢の転移もあり、ふるい語があたりらしい感覚
の語にとってかわられる場合もある。著者は古風をよしとする
が、しかし新風に順応するやわらかさももっていた。

4、右の三ヶ条は、はやうより誤来りて人おほく云めれば、今更
改めがたし。……諍ふべからず。（4の他、5 231 272 305 316 376）

ト、京ことばとてもあしきあり（642）、地方語とてもよきものある
（48）をみとめる。

642、其様なこと……といふべきを　そんなこと、そがいなこと、
……そんなこつちやなどいふこと葉を……いふべからずと云り。
京の者の口になれて……なをりがたし。

48、……ぬかりといふは、吾妻こと葉なれどよきこと葉と云り。
288、「その所々のこと葉なれば、いづれをよしあしともさだめが
たし。皆由緒あることにてもや待らん。」などと寛容の態度をと
る。

以上のべたごとく、著者はみずからの信ずる規範意識を基に、か
たこと批評の信念と論述を展開しているが、態度は謙虚、文章は「
ただ詞」をもちいて平易流暢、発想は創意にとむ。尚古癖はある
が、言葉の変遷に対しては之を認容し、順応するゆとりもみせる。
関原の役後、わずか50年の時期にかゝる書を見るは驚異である。
「按るに言語の転訛を述べたるものにては此書尤も古かるべく、且
当時の俗語を知る為には益多かるべし。」とは国語学書目解題の評
である。（49、9、10、稿）